



「被爆した人の思い、そして感じたこと」

早来中学校2年 伊藤涼夏

私は、広島派遣事業を通し、考え方が変わりました。

戦争当時は、家族や友達など自分にとって大切な人を突然亡くすという恐ろしいことが沢山ありました。しかし、今は学校に行く、「おはよう」と声をかけてくれる友達や学校から家に帰ると「お帰り」といつてくれる家族がいます。それがどれだけ幸せで恵まれているのかを私は広島に行つて学びました。

今、私たちに、このような悲劇を二度と繰り返さないために何が出来るでしょうか。

私達一人ひとりに出来ることは限られています。平和を自負する日本に住む私達だからこそ、しっかりと考える使命があります。国の平和のために、二度とあの出来事を繰り返さないためにも。

まず、私は学校や家などで人と交流する時に、家族や友達と仲良くします。けんかには小さな戦争です。けんかを起こさないためには、理解と受け入れる心の広さを持ち、人に感謝の気持ちを持つことが大切だと思います。



「戦争が起きていた時の生活」 早来小学校6年 畠山祐大
5歳の時に被爆した塩治節子さんと出会い、戦争の体験談を聞きました。

ほとくのテーマ「戦争が起きていた時の生活」について色々聞きました。

塩治さんは、爆心地から1.6kmの所に住んでいて、奇跡的に命は助かりましたが、原爆で家は壊れてしまい、しばらくは山で野宿をしたり、壊れたお寺などで寝ていたと教えてくれました。

学校のことも聞いてみました。塩治さんが小学校に入学したのは、戦争が終わった後で、クラスには薄い教科書が三冊しかなく、くじ引きで当たった人しかもらえなかったそうです。塩治さんは友達から教科書を借り、お父さんが紙に書き写してくれた教科書を使っていたと話してくれました。

今は教科書や勉強に必要な道具は、全員が持っています。でも、それは当たり前なことではないと知り、もっと教科書を大切に使うと思ったし、勉強も頑張ろうと思いました。



「放射線による後遺症」 追分小学校6年 丸岡蒼依

当時被爆した人たちは、放射線による後遺症で亡くなっていたかと思われる方もたくさんいて、塩治さんが吐いて亡くなり、塩治さんの妹さんは、被爆の7年後に突然40度の高熱を出し、翌日に熱は下がったものの息を引き取ったそうです。二人とも原因はわからないままでしたが、原爆の放射線による後遺症が影響していたと塩治さんは話していました。

また、原爆病の一つである放射線白内障も多くの被爆者に発症していて、広島でお世話になった碑めぐりガイドの平原さんは、両親が被爆者で終戦後に産まれたが白内障になりました。被爆2世の子どもたちも原爆病と同じような症状がでるケースがたくさんあるそうです。国は原爆病と認めていませんが、原爆の放射能は時を越えてまでも何の罪も無い人々へ影響を及ぼしているということに私は強い恐怖を感じました。私は被爆2世の方々も原爆病と認めて欲しいと強く感じました。



「原爆を体験した人の思い」 安平小学校5年 本野吉倅
碑めぐりガイドの平原さんは平和記念公園内のいろいろな碑を案内してくれました。

「平和の池」は、やけどを冷やし、水を飲むという想いで作られ、「祈りの泉」は原爆でやけどを負った体を水で冷やしてあげたいという想いで作られています。「平和の灯」は手の平で持っているイメージで作られて、世界から核兵器が無くなることを願っています。「原爆の子の像」は、12歳で原爆病で入院した佐々木禎子さんが折鶴を千羽折ると病気が治るといふ言い伝えを信じて折って13歳で亡くなったのをきっかけに原爆で亡くなった子どもたちをなぐさめるために作られ、毎年、たくさん千羽鶴がさげられています。

そして、祈りの泉、原爆死没者慰霊碑、平和の池、平和の灯、原爆の子の像、原爆ドームは一直線上に並んでいて、それは平和についてまっすぐ考え、一つになるという想いでそのようになったということを感じ、多くはすぐい考えだなと思ひ、早く世界が一つになるといいなと思いました。

平和を願う一日

8月30日、追分公民館で平成26年度安平町平和祈念式典が開催され、122柱の御霊に祈りを捧げました。

瀧町長は式辞において、「平和憲法を順守し、戦争がない核兵器や放射能に脅かされることのない社会を目指す。」と述べ、参列者とともに献花。式典の最後は、平和大使を務めた谷口柚香さん（追分中3年）による「核兵器廃絶平和の町宣言」の朗読で閉式となりました。

